

## 20

## 張家山『算数書』「医」にみる医者の評価

—周礼医師との関係—

猪飼 祥夫

北里大学東洋医学総合研究所医史学研究所客員

『算数書』の竹簡は1984年初めに湖北省江陵县(今の荆州市荆州区)張家山二四七號墓から出土した。同時に1200枚あまりの竹簡があった。『算数書』は多くの竹簡の左下部にあり、全部泥で覆われていた。泥で押しつぶされていたために、完全な捲かれた状態は失われていた。

整理して復元された算数書の竹簡は190枚、竹簡の長さは29.6–30.4cm、幅は0.6–0.7cmだった。竹簡の縄目は上中下三線で一巻を編成していた。第六簡の背面に『筭(算)数書』と書名があった。この書物の中に「医」という規程があり、医者の評価を計算する方法が書かれていた。これらの出土品は前漢時代の紀元前186年より早い時代のものである。

正式な出土報告書『張家山漢墓竹簡[二四七号墓]』には、読解が不明とのことで注釈がない。その後多くの人が写真版を元に読解をはかった。C. Cullen (2004) や鄒大海「從出土文獻看上古醫事制度與正負數概念」(2010)、簡帛網に発表された吳朝陽「張家山漢簡《算数書》“醫”簡蠡測」(2011)によってやっと読解できるものとなった。ここでは吳朝陽の解説によって報告したい。

「醫 程曰、醫治病者得六十筭(算)而負廿筭(算)。稽從程、及弗及、以六十計之。今醫得筭(算)千三百卅五、而負筭(算)三百八十二、(072)得六十而負幾何。曰、負十七筭(算)二百六十九分筭(算)十一。其朮(術)曰、以今得筭(算)爲法、令六十乘負筭(算)爲實。(073)」

「醫 程に曰く、醫の病を治するもの、六十筭(算)を得て廿筭(算)を負う。程に従りて稽みるに、及ぶと及ぶにあらざるは、六十をもって之を計る。今、醫、得筭(算)千三百卅五にして、負筭(算)三百八十二なれば、(072)得六十とすれば負は幾何なるや、曰く、負十七筭(算)二百六十九分筭(算)十一となる。其朮(術)に曰く、今、得筭(算)を法となし、六十に乘しめて負筭(算)を實となす。(073)」

$$x:y = 60:17 \frac{11}{269} = 16140:4584 = 1345:382$$

$$\frac{382 \times 60}{1345} = 17 \frac{11}{269}$$

この計算式は治療者数が60人ならば20人の治らない人を認めるという規程であると思われる。すなわち約33%の不治を認め、治癒率を約67%とする。ここで患者数が1345人で不治の人が385人だったとき、60人換算ですると17と269分の11になる。これは約28.6%となり、治癒率が約71.4%となる。

『周禮注疏』卷五に「歲終則稽其醫事、制其食。十全為上、十失一次之、十失二次之、十失三次之、十失四為下、」鄭玄「注食祿也。全猶愈也。以失四為下者、五則半矣或不治自愈」

「歲終わりて、則ちその医事を稽みて、もってその食を制す。十全を上となし、十に一を失うをこれに次し、十に二を失うをこれに次し、十に三を失うをこれに次し、十に四を失うを下となす。」鄭玄「注に食は祿なり。全とは猶ど愈ゆるなり。四を失うをもって下となす、五なれば則ち半なり。治さずして自ら愈ゆるなり。」という。

これを考えると医者は最低でも六割以上を治療しなければならない規程である。先の規程に寄れば約67%であるから、下のランクの医者ということになる。また計算式として出ている数の治癒率は約71.4%であるから、中の下にあたる医者ということになる。

すなわち醫者の勤務評定が行われ、給料が決まるのである。これから上工、中工、下工の分類が出てきた。これまでこのような勤務評定が本当に行われていたのかどうかについて非常に疑われていた。

村井琴山は『醫道二千年眼目編』(1807)で、このような『周禮』の記述を吉益東洞(1702–1773)は疑っているといい、さらに宋の程頤の『河南程氏遺書』卷第一の十人みんなが死病ならどうするのだという言葉を引いている。

『靈樞』『邪氣藏府病形』、『靈樞』『逆順』、『傷寒論』『平脈法』には、上工、中工、下工の分類は出てくるが『周禮』の醫師の勤務評定とは大きく離れたものとなっている。

この算数書の規程によれば、漢代初期には『周禮』の醫師に導かれた規程の医者の勤務評定が存在したことになる。漢の董仲舒『春秋繁露』卷七に「考功名」という章があり勤務評定は厳しく行われたことがうかがわれる。